

しがじん VOL.27 2022.12

SHIGAJIN

全障研滋賀支部発行 TAKE FREE!



「学習会報告 障害のある人の思春期における発達と教育実践」

「学習会報告 子どもたちのねがい、私達のねがい」

サークル活動報告



学習会報告 障害のある人の思春期における発達と教育実践



◎思春期について、みんなで考えませんか！（part.1）

全障研滋賀支部では、6月19日に「障害のある人の思春期における発達と教育実践」というテーマで、オンライン学習会を行ないました。今年2月に発行された『障害者問題研究 49巻4号』の特集を受けたもので、その号で「特別支援学校中学部生徒の発達の特徴と教育実践」を執筆された松島明日香さんと羽山裕子さん（ともに滋賀大学教育学部准教授）の話を受けたあと、論文中でインタビューに回答された先生方にさらに詳しく話してもらいました。また、保護者の立場からの報告もありました。今回から、その内容を少しずつ紹介します。ぜひ、皆さんからの「私はこんなことを大切にしている」「うちの子はこうだった」など、どんどんお寄せください。（しらいし えりこ）



中学部だからこそ、学校で学ぶことの価値を徹底して大事にできるのでは

浦嶋先生

みんなで、またひとつ、賢くなる。みんなと一緒に新しい世界に出会い、新しい自分、新しい友だちに出会う。そんな授業ができればいいなと思っている。中学部だからこそ、実践に自由度があることを活かしたい。

1人1台端末を使う実践をしている。すでに家庭で、スマホやタブレットの操作に親しんでいる子どもたちなので、授業で使うことを非常に楽しんでいる。使うことが目的にならないように、また、「楽しかったー」だけで終わらないように、子どもたちにどんな力をつけてほしいかきちんと考えたい。1学期は、国語でローマ字入力に取り組んでいる。8人クラスで、ローマ字表記の理解がねらいの子もいれば、ローマ字の配置をつかむこと、アルファベットと出会うことがねらいの子もいる。取り組み方も、アルファベット一覧表を見ながら、その日のお題を入力する子どももいれば、見本のつづりを見て入力する子どももいる。「タブレット！」に加えて「英語！」と言う子が数人いて、なかには「かっこいい！」と言う子もいる。わざわざ、ローマ字入力の配置にして取り組ませている。困った時はより便利な方法で！ということも大事だと思うが、じっくり見て、考えて、時間かけて取り組むことも大事にできるといい。毎回、さ行とかた行とか、一行ずつ取り組んでいるので、か行にはKが一緒とか、あ段にはAが一緒とか、そういう気づきや発見もある。みんなで発見したことは、次の時間の発見にもつながっているし、なかなか難しい子も、みんなの発見を繰り返す中で気づいていくこともあるなあ。

成田先生

中学部の年代は興味関心が広がり、友達の影響もとても大きくなる時期だと思う。音楽の授業で、小学部時代とは比較にならないくらい、たくさんの音楽に出会う可能性が開けてくる時期だ。その中で、「この音楽が好き」と言えるものに出会えるような、音楽の授業にしたい。

これまでの音楽の授業で、春から秋にかけてたくさんの歌を歌いたいと思ってきた。そして、自分のお気に入りだけではなく、みんなと歌った歌の財産ができることを願ってきた。こうした下地があって、冬には独唱の機会を大切にしてきた。秋までに歌ってきた歌の中から、自分で曲を選び、独唱する曲と選曲理由、どのように歌うのか（どこを聞いて欲しいのか）を書き、エントリー用紙を提出する。独唱すると、自分の声が、ダイレクトに自分の耳に入る。仲間の視線や、教室の空気も感じる。

その時、歌声が震えるというか、揺れるというか、変化する。緊張して震えるというのではなく、その場や仲間の作り出す雰囲気や醸し出す臨場感によって、より一層気持ち集中し、一人一人の生徒の「素」の良さが、歌声や歌う佇まいから滲み出てくる。音楽の授業は、理屈ではなく感覚的に心地よさを体感するとともに、ただ気持ち良いというのとは違い、自分にとって程よく良いものを選ぶような感覚を身につけることができる時間なのだと思う。それを可能にするのに、歌唱活動は大きな意味を持つと思う。呼吸を通して歌うということは、自分と向き合うということと直結していると思う。音楽を通して、集団と関わる自分や、自分の本当に心地よいと思うものを見つけたり、いいと思うものが仲間と共有できたり、心の中にいつまでも残るフレーズが蓄えられたり…そういった音楽活動に関われるようになるのが中学部段階だと考えている。



高等部のダウン症男子のお母さんから

結城さん

9歳の時に頸椎の手術をした。その際に思春期早発症が判明。ヒゲが生え、体つきが変わった。イライラが激しかった。手術の入院のストレスだけでは説明がつかないと感じるほど。その後、13歳の誕生日まで注射をし、成長を抑えた。13歳で注射終了したら、また、イライラ。男性ホルモンってすごい。言うことを聞かない、無視するなど、よくわかる感じで出てきた。「自分は中学生。何でもできる！」と思い込んで、自転車で、一人で出かけ事故にあったりも…。でも、今思えば、一般的な思春期よりかわいいもの。どうしたもんかなあと思っていた程度かなあ。身体のフォローは、シングルなので、どうしようもない面もある。本人もわかっていないことがある。これは、ずっと抱えている問題。

高校生になり、一人部屋を作った。これまで、なんとなく、みんなで一緒にいたが、一人の部屋を作ったところ、部屋で過ごすように。用事があればちゃんと下りてくるし、みんなでテレビを見ることもある。でも、一人になれるところも欲しかったのかな。もっと早く作ってあげればよかったかな。「棚が欲しい」など言うてくることもある。

高等部になり、よいモデルがいるクラスになり、張り切っている。高等部になり、ころっと変わった感じがする。ちゃんとやらんと、という感じ。バス停までの単独通学の練習を始めている。時計をはめて、下を向いて歩く癖があるが、単独通学するなら前を向かないとダメだと説明したら、前を向いて歩くようになった。一つ、思春期を乗り越えたかな。脱出したのかな。いろんな自覚が芽生えてきていると感じる。ちょっと困っているのは、歯の矯正を再開したのだが、仕上げ磨きが必要。でも、高校生のプライドがあって嫌がる。説明するのに、いろんな支援を取り入れながら、試行錯誤してやっているところ。



感想をいただきました！

今日はありがとうございました。思春期が中学部だけのものではなくてずっと続く…現在高等部にいて本当にそう思います。自分が大事にされている実感を友だちが大事にされている様子から気づく…周りの様子が見えてくる…いろいろな人がいる、いろいろな考え方がある。どれもがつながっているんだなとも改めて思いました。



学習会報告 子どもたちのわがい、私達のわがい〜発達保障をみんなで〜

10月1日の学習会はハイブリッド、約30人余り、滋賀、愛知、奈良、大阪、などからの参加がありました。会員二人からの話題提供、その後、講師の越野和之先生にその後のグループトークのポイントをはなしてもらい、5つのグループで議論、最後越野先生の講演、で締めくくりました。

◎成人期の入所施設(伊香立の杜^{い かつ たち もり} 木輝^{こ こ}) 藤井さんより

伊香立の杜は天津市北部の主に強度行動障害をもつ利用者が暮らす50人余の施設です。(※若干通所あり)「日中支援とグループホームを併せ持ち24時間利用者の姿をつかむ、その中で豊かな支援を進めていこう」と2009年度に開設しました。

そもそも福祉現場は、職員の勤務時間が不規則です。引き継ぎ内容に統一感がなく「事故さえ起こさなければいい」と、支援する側の都合が優先しがちでした。そこで「その支援はその人に必要?」「本人さんはその方法を望んでいるの?」と問いかけ、記録や個人支援計画の書き方、10年先を見越した際その人の現在の支援のどうか等を各々検証しました。一人ひとりの障害の特性、弱点に焦点を当てず「見ることも支援」「参加できなくてもその場面の空気を味わうのも参加」とします。合わせて一対一でなく、集団で見えていこう、と共通認識を持ちました。「できることばかりを数えず、去年に比べてその人が変わろうと葛藤している姿もみよう」と確認しました。その際「みんなが」の小淵健司さんの連載の読みあわせをし、月一回4時から5時、その時集まれる職員で学習しました。(※今はコロナなどのため中断)あのとときの学習会の成果が(部分的ですが)あるのでは、と考えています。

もう一つ、強度行動障害の成人期の利用者への支援を作成する「支援手順書」に頼っている職員があまりに多いということです。利用者は生身の人間です。私達は利用者の見方が変わるようマニュアルにあわせるのではなく、職場を変え、努力していきたいと思っています。

◎県立養護学校 小学部教員より

私の職場は県内でも有数のマンモス校。メイン廊下は100m。そのため、子どもの名前も顔もましてや同僚の名前も学部が変わるとあやふやです。会議や明日の資料づくり、教材づくりに追われて、子ども達の日あったことを意見交換する余裕がない状況です。

そんな中この夏、次のような出来事がありました。「熱中症対策のため晴れでもプールができない事態」です。マンモス校のため他校よりプール授業の回数が制限されてるのに、さらになくなる。子どもたちは「なんで?」と何度も聞いてきます。子どもの健康安全のため、と言いますが、代わりにそれを根本的に解決する策はというと「特にない」ままなのです。

そして、もう一つ。県から、全県で成績の様式を統一する案が示されました。しかし、そこにはこれまで現場が大切にしてきた、子どもの中心的な教育課題(健康・身体・認識・コミュニケーション・自己形成)を評価する項目が廃され、教科の評価のみの様式が示されました。これまで、子どもの中心的な教育課題を検討する中で、子ども理解を深め、教員の専門性を担保し、保護者と繋がってきました。それが、校内の論議やニーズに応じた変更ではなく、外部から「効率化」のもとに変更を余儀なくされようとしています。そ

んなモヤモヤとした学校生活、みなさんもいろんな悩みや困り事を抱えているのではないのでしょうか？話す時間やゆとりがない。

一方で、職場での矛盾を抱えながら、研究部という立場で、発達保障を根付かせる取り組みもしています。意識的に「集団とは?」「発達保障とは?」とキーワードにこだわり、いろんな先生に講師として依頼し学んでいます。今日の越野先生にも来ていただきました。まずは、子どもの願いから出発して、子どもの主体や手応えを大切にできる学校、教師集団を作っていきたいと思います。

★越野先生から、ふたりの話題提供のあと、具体的な内容を整理し、グループトークにあたっての対話のポイントについて以下のように提案されました。

- ①そもそも発達保障とは何か
- ②発達保障を実践に生かすために何を大切に日々過ごしているのか
- ③集団で困ったことやその人の小さな変化を共有するためにどんな工夫や努力をしているのか

◎各グループトークのまとめ

Dグループは、退職組、転職組、研究者といったメンバーが中心でした。ふたりの話題提供を受けて感想を述べました。

それぞれがいろんな仕事を経験してきていることから「職場や時代が変わっても変わらない、変えてはいけない大事なこと」というのを話せました。つまり、毎日の関わりの中で見つけた子どもの何気ない姿から子どもの話を始めることの大切さ。「日常的に子どものことを話せる関係を築くことができればやがて共通言語を作り出せ、発達についても話せるようになるのではないか」といったことです。各々の発言にみんなでウンウンと頷き聞き入りました。(まとめ、能勢)

Eグループでは、そもそも発達保障とは何?ということについて

- 自分が自分らしくいられるために一人一人の願いが保障されること、そしてその条件を作ること
 - そのためには外を向き、たくさんの人と手を繋いで、追い求めることが大切
- ということが出されました。

また、「発達保障を実践に還す」という切り口では、「子どもを理解するポイントや発達の捉えるためにどのように学んだら良いか」ということを話しました。短時間でしたが、現地に集まった良さを生かし、学習会後もグループトークの延長戦もありました。

グループホームの職員になって日が浅い参加者からは「仲間（利用者さん）と過ごす毎日は居心地が良く、成長される姿を嬉しく思う。でも今のままでよいのかと思う。自分も仲間に力をつけてあげたいと思う。どうしたら良いか?」という率直な思いが出されました。「居心地の良さを作ること」「安心できる関係性を築くこと」「発達の視点をもちながら、願いや困り感にアプローチするための切り口を探ること」「職員集団で共有することの大切さ」などを話しました。

他にも、具体的なケース（パジャマを洗わずに片付けてしまう、他者との距離感が近いなど）が出され、それについて「どう理解したら良いか?」「発達の捉えるとは?」という切り口で話を深めました。越野先生の話と重なることも多く、現地で顔を合わせながら、話すことの意義や楽しさを改めて感じることでできたグループトークでした。(まとめ、佐々木)

◎越野和之さんの講演

主に「発達保障の歴史的背景と流れ」についてお話されました。1960年代戦後まだ混乱から高度経済成長へ邁進する中で「障害を持つ子どもにも教育を」「卒業後の進路、作業所をどの地域にも」「重心の子どもにも訪問教育を」と運動が広まるにはその潮流を作った土台や必然性があり、ひとりから二人へ、それが



大きなうねりとなって広まったのだということに私達は確信をもてばいい、と話されました。今の教育評価や個別化した流れとどのように向き合い乗り越えていくか。「昔はもっと条件が貧しかった」いくつものエピソードにうなずきながら、明日からの小さなステップを大きなうねりに変えていこうと感じ取れるお話になりました。優しい語り口ですが、皆さん何度もうなずきながら聴いておられました。

◎まとめ

短い時間でしたが、濃密な時間でした。日頃のモヤモヤした気持ち、不安がいろいろな世代や経験の人、異業種の人と意見交流し、「同じ悩みを持っている、ひとりじゃないんだ」と知ることができました。また次回以降もこんな機会を作りたいなと思っています。参加の皆さん、ありがとうございました。

…感想をいただきました！…

教育現場だけでなく、福祉の現場の話も聴けて、とても勉強になりました。今学校現場でもICT教育や支援計画に縛られ、子どもとの触れ合いやゆっくりした関わりができない現状があります。私自身も情報機器の整備に追われ、明日の授業準備が18時からしかできないという中で、子どもたちの思い・ねがいを知りたいともどかしい思いを感じています。忙しい中ではありますが、仲間と子どものことを話し合う時間を確保していきたいなと感じました。



サークル活動報告 マリーゴールドの会



マリーゴールドの会（通称：MG会）はマリーゴールドの会（通称：MG会）の紹介です。MG会では成人障害者への支援をしているメンバーが、リモートで活動しています。

5月に、5か月ぶりに定例会があり、6か所の事業所から8人の参加（リモートでの開催）でした。コロナ禍のもとでの各事業所の状況を出し合った後、事例報告に入りました。

今回のテーマは「困難な利用者に対する支援を職場集団としてどのように共通理解し、深め、実践を進めているか」ということで、草津市のワークパートナーきららの奥村さん、梅影さんから報告、その後意見交流しました。

「強度行動障害」のA君が自分の意見が通らないと困った行動を何年も繰り返していたのですが、担当を一人体制から二人体制にしたことで、互いに実践の方向性「今の言葉かけはどうだったか」「Yくんの今の気持ちはどうだろうか」と意見を交わすことが増え、彼に対する向かい方を日々反省しながら前に進められるようになったこと、彼の通所が週2日になった（別の日はもう一つの作業所に）こともあり、彼に対する取

り組みに余裕が生まれ、客観的に向き合う時間ができたこと、などが話されました。

とりわけ、細切れになっていた日課を改め、彼の一番好きな「ドライブ→お昼のお弁当の買い物」をたっぷり保障したこと、他の通勤者を待たせることなくじっくり彼のペースを尊重した、とのことでした。

そのなかで、彼自身が自ら「おしごと」と誇らしげに言うようになったり、休憩時間に同じ空間で他の通勤者とゆったりすごせるようになった（以前には、全く考えられなかった）ことが語られました。「こちらの意図はわかってくれてるんやな」と確信がもて、そのあたりからA君自身も職員のことを信頼するようになった、ワークをただやらされる存在から「役に立ちたい、職員に喜んでほしい、それがおしごとなんやな」とわかってくれたのではないかと話されました。

参加者は皆さんは、現場で経験のある利用者と重ね合わせ、うなずきながら聴きました。

まとめとして、白石恵理子さんから「単に担当を1人から2人にしたからだけでなく、彼への理解を職場全体の共通認識にできたことで、彼の安心感や仕事に向かう気持ちになったのだと思う。ぜひ、さらに深めてほしい」とコメントがありました。また参加者からも「彼が“オシゴト”と言い始めていることの意味を深め、仕事の内容についてさらに検討してほしい」といった意見が出されました。

7月例会は、おうみ作業所月田さんからの報告でした。参加者は、8人。

まず、月田さんからAさんという男性のケースについて話されました。家族への暴言があり、家族の介護が難しくなり、実習を経てホーム入居に至った人です。Aさんは、簡単なメールでお母さんと日常のやり取りはできるものの、自分の気持ちを言葉を介して伝えることが苦手です。そのため、自分の気持ちがうまく伝わらないと手元にあるものをホームの2階から投げたり、ものを壊すことが頻発します。そのたびに担当職員やサビ管がキーパーから事情を聞き、本人の話も聞きつつ、時には急に泊まることもある、とのことでした。

そこで、2つの視点で意見交換をしました。

一つは、Aさんの「問題行動」の原因は何なのかについてです。きっかけは直近の出来事であることが多いのですが、「頷くのでわかっていると思ったが、言葉だけでは理解しづらいのかもしれない」「むしろ、ゆっくり丁寧に話を聞きながら、少し時間をかけてコミュニケーションをしていくことが必要かもしれない」と確認しました。日中は年月をかけて仕事の流れや後輩に教える力をつけてきているけれど、家では野球に夢中になって、部屋の片付けや次の日の準備まで気持ちが回らないことが多い。単に注意するだけでなく、気持ちを引き出すような楽しい伝え方、「阪神の〇〇選手みたいに～をやろう」「お風呂掃除、△△さんの代打、お願いできますか?」「さすが～選手みたいやね、スゴいなあ」と、大好きな野球の話を経絡てもいいのではないかという意見が出ました。

後半は、主にホームのキーパーと日中支援の職員の仕事の固有性と連携について話しました。他施設の例でも、互いにすぐにホーム側、昼間側に原因や理由を求めたりしがちですが、キーパー会議や利用者への共通理解を深める学習の場を設けるなど、キーパー自身の利用者に対する理解の幅を広げていけるような場が必要だと話されました。「生活ってこんなもんやからこの程度の支援で良い」「当たり障りのない支援がグッド」となってしまうしがちです。一方で、生活の場面だからこそ出てしまうことを整理したり、傾向を類推したりする姿勢も大切だと確認しました。

グループホームは近年民間の株式会社が参入し、入居者を選別したり重度の人の問題行動があれば断るなど、経営優先の考え方が広がりつつあります。本人さんの気持ち、余暇の過ごし方など課題は山積みです。今回の報告はタイムリーで、それぞれに気になる利用者のことを思い浮かべながら議論に参加しました。



PONTAの
76 ゆるい日々



最近のはなにわ男子にもハマっている



そ...そんな理由...?!

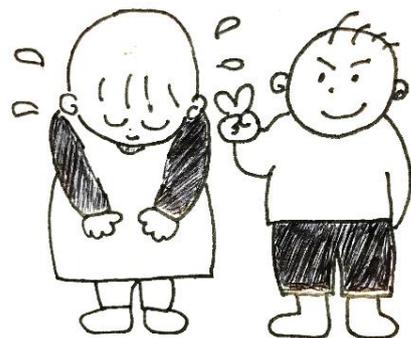
PONTAの
17 ゆるい日々



たぬきや = PONTAの通う作業所



家ではいつかごはんを
2回おかわりするPONTAある



母 ぽんた(21)

Ponta は、21歳のダウン症の男の子です。三人きょうだいの末っ子。

秋生まれのPontaは、このたび21歳になりました。

離れて暮らす兄と姉から、なにわ男子のCDやグッズが届いて大喜び!!

なにわ男子が紅白に出るのも楽しみです。

皆様よいお年を(^o^)



..あとかき..

編集担当のにむらです。編集している今は10月ですが、クリスマスメドレーを聴きながらうきうきで編集しています。サンタさんには、布団から出たことに気付かないくらい温かいパジャマを頼みたいです。



◎今回の表紙 「White Christmas」

唐崎やよい作業所 阿部葵(あべあおい)さん

お出かけ先で見たもの感じた事を自分なりの表現で作品にしていきます。

自分の描いた作品がみんなに見てもらえることを楽しみに、新しい作品作りにも挑戦しています。今回の作品はChristmasが雪のWhite Christmasになればいいなと願いながら描きました。